

保育の心理学

平成28年度

前期 10問

問 1

次の文は、子どもとの関わりにおける環境としての保育士についての記述である。(A) ~
(D) にあてはまる語句を【語群】から選択した場合の最も適切な組み合わせを一つ選びなさい。

保育士が子どもたちの「心のよりどころとなる」には、アタッチメント（愛着）の発達過程で示されるように、子どもの発するサインに対して、保育士がタイミングよく子どもの要求にそった (A) をすることによって、子どもとの間に (B) が結ばれる。

特に、気持ちが不安定になりやすい時期や場面においては、心のよりどころとしての保育士の存在が重要となる。

乳児期後半の子どもは、保育士を安全基地として (C) を展開するようになっていく。その後、子どもの (D) 的な発達にともない内在化された保育士のイメージに支えられて、その場に保育士がいなくても、情緒的な安定をはかることができるようになる。

【語群】

(組み合わせ)

A

B

C

D

ア, 規律的関わり | イ, 応答的関わり | ウ, 情緒的な絆

| エ, 補完的な絆

オ, 探索行動 | カ, 人間関係 | キ, 認知 | ク, 運動

1

ア

ウ

オ

キ

2

ア

エ

カ

キ

3

イ

ウ

オ

キ

4

イ

ウ

カ

ク

5

イ

エ

オ

ク

保育士が子どもたちの「心のよりどころとなる」には、アタッチメント（**愛着**）の発達過程で示されるように、子どもの発するサインに対して、保育士がタイミングよく子どもの要求にそった（**応答的関わり**）をすることによって、子どもとの間に（**情緒的な絆**）が結ばれる。

特に、気持ちが不安定になりやすい時期や場面においては、心のよりどころとしての保育士の存在が重要となる。

乳児期後半の子どもは、保育士を安全基地として（**探索行動**）を展開するようになっていく。その後、子どもの（**認知**）的な発達にともない内在化された保育士のイメージに支えられて、その場に保育士がいなくても、情緒的な安定をはかることができるようになる。

問2 次の文は、人の生涯発達に関する記述である。適切な記述を○、不適切な記述を×とした場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

A.人の生涯発達は、遺伝的要因と環境的要因との相互作用によって促される。

B.人の生涯発達における文化の影響は、乳児期において最も大きい。

C.人の生涯発達とは、上昇的变化の過程を意味する。

D.人の生涯発達は、個人的に重要な意味をもつ出来事の影響を受ける。

(組み合わせ)	A	B	C	D
1	○	○	○	○
2	○	○	×	○
3	○	×	×	○
4	×	○	×	×
5	×	×	○	×

回答

3

解説

○

A・・・人の生涯発達には、遺伝的要因が重要であると思いがちだが、遺伝的要因と環境的要因の相互作用が影響する。

×

B・・・生涯発達における文化の影響は、どの年齢でもあり得る。乳幼児が最も大きいとは言いがたい。

×

C・・・生涯発達とは、上昇的变化のみではない。必ずしも上昇するとは限らない。

○

D・・・生涯発達には、個人的に重要な意味をもつ出来事に、当然ながら影響される。さらに重要な他者の存在も影響する。自分に置き換えて考えてみよう。恩師に出会えたから、生き方に变化したこともあるだろう。

問3

次の文の（ ）にあてはまる用語として、最も適切なものを一つ選びなさい。

生後数日の赤ちゃんが、他の赤ちゃんの泣き声を聞くことで泣き出すことがしばしばみられる。

このように生後間もない赤ちゃんは、自他の区別があいまいなまま、他者の感情に巻き込まれる経験をする。こうした赤ちゃんの行動は（ ）と呼ばれる。

1. 模倣
2. 同型性
3. 感情移入
4. 共感性
5. 情動伝染

生後数日の赤ちゃんが、他の赤ちゃんの泣き声を聞くことで泣き出すことがしばしばみられる。このように生後間もない赤ちゃんは、自他の区別があいまいなまま、他者の感情に巻き込まれる経験をする。こうした赤ちゃんの行動は（情動伝染）と呼ばれる。

情動伝染とは、他者の特定の感情表出を見たり・聞いたりすることによって、自分自身も同じ感情を経験する現象である。

例えば、近くにいる他者が泣いていたら、こちらも悲しくなったり、他者が笑っていれば、こちらも楽しくなることである。赤ちゃんは、この情動伝染を多く受ける傾向がある。

問 4

次の文は、ピアジェ（Piaget, J.）の理論に関する記述である。適切な記述を○、不適切な記述を×とした場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

A.物は隠れていても存在し続けているという物の永続性の理解は、ピアジェ（Piaget, J.）が提唱した月齢よりも早い時期であることがその後の研究によって示されている。

B.誕生から3歳頃までの子どもは、触る、叩く、なめる等の感覚運動を通して世界を理解している。

C.前操作期の子どもは、イメージや言葉を用いて世界を捉えることができるようになるが、それは自己中心的で、知覚的特徴に影響されやすい。

D.外界の対象に働きかける際に、その対象を自分に合うように変化させて、自分の内部に取り入れることを調節という。

(組み合わせ)	A	B	C	D
1	○	○	×	○
2	○	○	×	×
3	○	×	○	×
4	×	○	○	○
5	×	×	○	×

回答

3

解説

○

Aは○である。

物の永続性とは、視界から消えた対象が存在し続けていると認識する能力である。ピアジェは、物の永続性は、生後8か月頃から成立するとしていたが、その後の調査により、3－4か月にはすでに存在していることが明らかにされた。

×

Bは×である。ピアジェによれば、感覚運動期は、0－2歳とされている。

○

Cは○である。前操作期の特徴は、言語を用いた思考が不得意、強い自己中心性、見た目により大きく影響される、基準にしたがい分類・並び替えが不得意などである。

×

Dは×である。調整ではなく、同化である。同化とは、自分がかつと持っている認知的枠組み（シエマ）によって、身の回りのことを把握することである。

問5 次の分は、子どもの感情の発達に関する記述である。(A) ~ (E) にあてはまる語句を【語群】から選択した場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

感情の発達については、運動・認知・自己の発達と関連しながら分化していくという考え方がある。

この考え方の代表的な提唱者(A)によると、誕生時には、(B)、苦痛、興味の原初的感情をもって生まれ、生後3か月頃までに、(C)、悲しみ、嫌悪の感情がみられるようになり、6か月頃までに、驚き、怒り、(D)の感情が分化していく。これらは(E)と呼ばれ、見知らぬ人への反応などに反映されていく。

他方、感情の発達については、基本的な感情は誕生時に備わっており、主として感情を抑制する側面が発達するという考え方がある。

【語群】

ア,一次的感情 イ,充足 (contentment)	(組み合わせ)	A	B	C	D	E
ウ,二次的感情 エ,ルイス (Lewis, M.)	1	エ	イ	オ	カ	ア
オ,誇り (pride) カ,感動 (affect)	2	エ	イ	オ	コ	ア
キ,喜び (joy) ク,サメロフ (Sameroff, A.J.)	3	エ	イ	キ	ケ	ア
ク,恐れ (fear) コ,恥 (shame)	4	ク	カ	オ	コ	ウ
	5	ク	カ	キ	ケ	ウ

感情の発達については、運動・認知・自己の発達と関連しながら分化していくという考え方がある。

この考え方の代表的な提唱者（ルイス（Lewis, M.））によると、誕生時には、（充足（contentment））、苦痛、興味の原初的感情をもって生まれ、生後3か月頃までに、（喜び（joy））、悲しみ、嫌悪の感情がみられるようになり、6か月頃までに、驚き、怒り、（恐れ（fear））の感情が分化していく。これらは（一次的感情）と呼ばれ、見知らぬ人への反応などに反映されていく。

他方、感情の発達については、基本的な感情は誕生時に備わっており、主として感情を抑制する側面が発達するという考え方がある。

ルイスによれば、人は誕生した時から、充足・興味・苦痛の原初的な感情を備えている。そこから乳児は充足を通して生後3ヶ月までに、喜びを表現するようになる。同時に苦痛からは、悲しみ・嫌悪の表出が見られるようになる。生後4～6ヶ月になると欲求不満状態と関連して、怒りが、少し遅れて、恐れが表出されるようになる。その後、3歳頃には、ほぼ大人と変わらない感情表出になるという。

問6 次の説明を読んで、以下の【設問】に答えなさい。

新生児は、生存を維持するための生得的な仕組みを備えている。

【設問】

生存を維持するための生得的な仕組みとして、あてはまるものを○、あてはまらないものを×とした場合の、正しい組み合わせを一つ選びなさい。

【語群】

- A.バビンスキー反射
- B.信号行動
- C.社会的微笑
- D.顔の形態的特徴

(組み合わせ)	A	B	C	D
1	○	○	○	○
2	○	○	○	×
3	○	○	×	○
4	×	×	○	○
5	×	×	×	×

回答

3

解説

○ → A・・・**バビンスキー反射**とは、足の裏をとがったもので踵からつま先にむけてゆっくりと擦る。すると、あしの親指が足の甲の方にゆっくりと曲がり、他の指は外側に開く。2歳未満の乳幼児には普通に見られる現象である。

○ → B・・・**信号行動**とは、乳児は泣いたり身振りしたりすることで、親が反応してその状況が変わることを言う。

× → C・・・**社会的微笑**とは、生後すぐに始まる生理的微笑の次に出てくるものである。早ければ生後二か月頃から遅くても生後半年までには、ほとんどの乳児で見ることができる。これは、周りの大人が乳児をあやすことで見られる。生理的微笑は、生得的なものである。

○ → D・・・**乳児の形態的特徴**とは、乳児が生まれ持った身体の特徴である。具体的には、体に対する頭の大きさの割合が大きい、大きい額、目が大きい、鼻と口が小さく頬がふくらんでいる、体がふっくらして手足が短くずんぐりしているなどである。これらは、大人を引き付け、愛情行動を引き起こす。

問 7

次の文は、「保育所保育指針」第2章「子どもの発達」の2「発達過程」の一部である。それぞれにあてはまる発達過程の区別の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

- A. 基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。
- B. 歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。
- C. 歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。

(組み合わせ)	A	B	C
1	おおむね1歳3ヶ月から2歳未満	おおむね3歳	おおむね2歳
2	おおむね1歳3ヶ月から2歳未満	おおむね2歳	おおむね3歳
3	おおむね2歳	おおむね3歳	おおむね1歳3ヶ月から2歳未満
4	おおむね3歳	おおむね1歳3ヶ月から2歳未満	おおむね2歳
5	おおむね3歳	おおむね2歳	おおむね1歳3ヶ月から2歳未満

A・・・3歳

保育所保育指針解説書P. 39には、次のようになる。

おおむね3歳では、「基本的な運動機能が伸び、それに伴い、食事、排泄、衣類の着脱などもほぼ自立できるようになる。話し言葉の基礎ができて、盛んに質問するなど知的興味や関心が高まる」である。

B・・・1歳3か月から2歳未満

同書P. 35には、次のようにある。

おおむね1歳3か月から2歳未満では、「歩き始め、手を使い、言葉をはなすようになることにより、身近な人や身の回りの物に自発的に働き掛けていく。歩く、押す、つまむ、めくるなど様々な運動機能の発達や新しい行動の獲得により、環境に働きかける意欲を一層高める。」である。

C・・・2歳

同書P. 37には次のように記されている。

「おおむね2歳では、歩く、走る、跳ぶなどの基本的な運動機能や、指先の機能が発達する。それに伴い、食事、衣類の着脱などの身の回りのことを自分でしようとする。また、排泄の自立のための身体的機能も整ってくる。」

問8 次の文は、子どもの仲間との関わりについての記述である。下線部 (a) ~ (d) に関連の深い語句を【語群】から選択した場合の最も適切な組み合わせを一つ選びなさい。

2～3歳頃では、(a) 近くで同じような遊びをしていても、互いのやりとりはみられないことが多い。活発にやりとりをして遊ぶようになると、(b) 自分がやりたいことと仲間のやりたいこととのぶつかり合いを経験することになる。その後、4～5歳になると、(c) 相手の立場に立って、自分とは異なる相手の気持ちや考えを徐々に理解できるようになっていく。

したがって、保育士は子ども相互の気持ちや思いをつなぎ、子どもが(d) 自分自身の気持ちをコントロールする力を身につけるように配慮する必要がある。

【語群】

ア, 連合遊び | イ, 対人葛藤 | ウ, 共感 | エ, 自己調整力 | オ, 平行遊び | カ, 対人拮抗 | キ, 役割取得 | ク, 対人調整力

(組み合わせ)	a	b	c	d
1	ア	イ	キ	エ
2	ア	カ	ウ	エ
3	オ	イ	ウ	ク
4	オ	イ	キ	エ
5	オ	カ	ウ	ク

2～3歳頃では、（平行遊び）近くで同じような遊びをしていても、互いのやりとりはみられないことが多い。活発にやりとりをして遊ぶようになると、（対人葛藤）自分がやりたいことと仲間のやりたいこととのぶつかり合いを経験することになる。その後、4～5歳になると、（役割取得）相手の立場に立って、自分とは異なる相手の気持ちや考えを徐々に理解できるようになっていく。

したがって、保育士は子ども相互の気持ちや思いをつなぎ、子どもが（自己調整力）自分自身の気持ちをコントロールする力を身につけるように配慮する必要がある。

場を共有しながらそれぞれが独立して遊ぶことを、平行遊びという。

人と人との間における対立を対人葛藤という。

役割取得能力とは、他人の気持ちや立場を推測する能力である。

自分自身の気持ちをコントロールすることは、自己調整力である。

問9

次の（ A ）～（ D ）の語句が正しいものを○、誤ったものを×とした場合の正しい組み合わせを一つ選びなさい。

子どもにとっての経験には、事物に触ったり、手に取ったり、見たりなど、視覚、聴覚、（A 遠感覚）、触覚、味覚といった五感を使って働きかける経験があり、それは（B 直接）経験と呼ばれる。一方、絵本やメディア、人の話・行動を介した経験もあり、それは（C バーチャル）経験と呼ばれる。レイチェル・カーソン（Carson, R.L.）は、自然との（B 直接）的な関わりのなかで、子どもが不思議に思ったり、感動したりすることを（D センス・オブ・ワンダー）と呼び、もっと知りたいという思いが促されるとした

（組み合わせ）	A	B	C	D
1	○	○	×	○
2	○	×	○	×
3	×	○	×	○
4	×	○	×	×
5	×	×	○	×

子どもにとっての経験には、事物に触ったり、手に取ったり、見たりなど、視覚、聴覚、（A 嗅覚）、触覚、味覚といった五感を使って働きかける経験があり、それは（B 直接）経験と呼ばれる。一方、絵本やメディア、人の話・行動を介した経験もあり、それは（C 間接）経験と呼ばれる。

レイチェル・カーソン（Carson, R.L.）は、自然との（B 直接）的な関わりのなかで、子どもが不思議に思ったり、感動したりすることを（D センス・オブ・ワンダー）と呼び、もっと知りたいという思いが促されるとした

Aは嗅覚である。経験には、直接経験と間接経験がある。意味は、読んで字のごとくである。

センスオブワンダーとは、レイチェルカーソンの言葉で、自然のなかで素晴らしさを意識できる感覚である。

問10 次の文は、子どもの文字の獲得に関する記述である。(A) ~ (D) にあてはまる語句を【語群】から選択した場合の最も適切な組み合わせを一つ選びなさい。

幼児期は話す、聞くという(A)による言語活動が中心であるが、幼児期後期では、(B)に興味を示すようになり、七夕の願い事や手紙を書くなどの(C)のなかで、仲間とのコミュニケーションを楽しむようになる。

そして保幼小連携のもと、小学校教育では(D)を身につけることが期待される。(D)とは、単に文字を読んだり書いたりするだけでなく、社会生活をおくるうえで必要な文章を読んだり理解したりすること、文章で表現することなどを含む。

【語群】

ア,書き言葉 | イ,リテラシー | ウ,話し言葉 | エ,文字 | オ,学習活動 | カ,発音 | キ,ソーシャルスキル | ク,遊び

(組み合わせ)	A	B	C	D
1	ア	エ	ク	イ
2	ア	カ	オ	イ
3	ウ	エ	ク	イ
4	ウ	エ	ク	キ
5	ウ	カ	オ	キ

幼児期は話す、聞くという（話し言葉）による言語活動が中心であるが、幼児期後期では、（文字）に興味を示すようになり、七夕の願い事や手紙を書くなどの（遊び）のなかで、仲間とのコミュニケーションを楽しむようにもなる。

そして保幼小連携のもと、小学校教育では（リテラシー）を身につけることが期待される。（リテラシー）とは、単に文字を読んだり書いたりするだけでなく、社会生活をおくるうえで必要な文章を読んだり理解したりすること、文章で表現することなどを含む。

Aは言語活動であるので、話し言葉となる。話し言葉のあとは、文字に興味が出てくる。Bは、文字であり、Cは、遊びである。文章を読んだり、理解したりすることは、リテラシーという。Dはリテラシーである。